

ESDレポート vol.31

2013年春 2013年3月25日発行

認定 NPO 法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議

ESDとは「持続可能な開発のための教育=Education for Sustainable Development」の略。環境・貧困・人権・平和など、私たちが直面するさまざまな問題に取り組み、豊かで公正な未来を創造するための「価値観」と「スキル」を育む、未来創造型の学びです。「国連持続可能な開発のための教育の10年（ESDの10年）」が2005年からスタートし、世界各国で取り組まれています。

Q. 持続可能な地域づくりに欠かせないものは何ですか？

※ 会員の皆さまからお寄せいただいたお考えを掲載しています。

●持続可能な地域づくりに欠かせないものは「人を育てる仕組み」です。多くの事柄で最も大切なことです。例えば“森づくり”で最も必要なものは「森を何十年も守り育ててゆく人材」です。つまり“森づくり”は“人づくり”なのです。持続可能な地域を支えて行く人材を育てることです。その人材を育てるための教育システムの確立です。

(ネイチャークラブ東海 篠田陽作)



●実際に現地に行って現場の状況を見、生活している人にとって意見を聞くことだと思います。長年住んでいる人も改めて地域を見直し、近所の人たちと自分たちの町や村をどうすればいいのかを話すよききっかけになります。私の住んでいる町内では3月末に自治会の総会があるのですが、地区全体のことをみんなで話し合い確認する大切な機会です。生活している場所で集まって話し合うことから地域づくりは始まるのではないのでしょうか。

(参加型環境教育研究会 原田 泰)

●地域を大切にする心。持続可能な地域づくりに向けた住民の自発性や当事者意識の育成には、住民自身が地域をよく知ることが肝要である。地域の歴史やそこに生きた先人の努力を知ることが、感謝の心や地域を大切に思う心を育てる。「女は弱し、されど母は強し」という言葉があるが、大切なものを守るために人は立ち上がり、行動する。持続可能な地域づくりのために、人々の行動の変革を促すのは、地域を大切に思う心である。(奈良教育大学 中澤静男)



次号のQ&Aは、「Q. “ESD” と “環境教育” の違いは何ですか？」です。

特集

全国各地から発信する ESD 最前線

ESD 世界会議が開催される 2014 年をひかえ、全国で ESD の活動や動きが加速しています。今号では、各地域でご活躍の ESD 関係者の協力を得て、地域からの ESD の取り組みを「ESD 最前線」として特集します。

目次

Q. 持続可能な地域づくりに欠かせないものは何ですか？ 1

特集 全国各地から発信する ESD 最前線

2014 年に向け、全国各地で ESD の動きが活発化！ 2

トピックス 立教大学 ESD 研究センター 5 年間の活動の記録 6

オススメ書籍のご紹介/新メンバー紹介/今後の予定 6



2014 年に向け、全国各地で ESD の動きが活発化！

国連 ESD の 10 年の総括となる「ESD に関するユネスコ世界会議」が、いよいよ 2014 年 11 月に日本で開催されます。その主要な開催地である愛知・名古屋、岡山だけではなく、全国各地で最近 ESD の動きや活動が活発化しています。地域に根ざした ESD の取り組みを、NPO、学校、企業、行政など多様な視点からご紹介し、その独自の取り組みを皆さんで共有したいと思います。2014 年とその先のネクストステージに向けて、持続可能な社会のための人づくりを盛り上げていきましょう。

北九州

北九州 ESD 協議会は、「つながろう、ひろげよう」をキーワードに産官民学協働で ESD 推進に取り組んでいる。九州各地で ESD に取り組む団体がつながり、情報共有等を目的に「九州 ESD 推進ネットワーク会議」がスタート。また、この春オープンする「まちなか ESD センター」は、北九州市立大学をホスト校として、市内 10 大学の学生と市民が ESD を核につながる拠点となる。さらに市との協働で進められた ESD コーディネーター育成講座「ESD 未来創造セミナー」が終了。修了生には ESD を推進する地域のキーパーソンになることが期待されている。<http://www.k-esd.jp/>

(北九州 ESD 協議会 三隅佳子)

岡山

岡山では、2014 年の「ESD に関するユネスコ世界会議」の岡山開催（各種ステークホルダー会議）に向けて、各準備委員会や支援実行委員会が次々と立ち上がり、取り組みが本格的に進み出しはじめた。2013 年 6 月には ESD-J の全国ミーティングが、10 月には「ESD の 10 年地球市民会議 / ESD テーマ会議」が、いずれも岡山で開催される。全国の皆さんが参集いただけるこうした機会を活かしながら、2014 年に向けてのオールジャパンの取り組みを岡山から盛り上げていきたい。

(岡山ユネスコ協会 池田満之)

岡山市・倉敷市で行われた
アジア青年未来プロジェクト →

愛媛

アフリカ・モザンビークで現地の市民団体が自転車やミシンを銃と交換する「銃を鋤へ」平和構築プロジェクト——愛媛の ESD は、これとの出会いから始まった。「なぜ、私たちはアフリカや途上国で暮らす人々を知らないのだろうか？」という問いからの学び。一方で、私たちの地域の道路にあふれる放置自転車から、「放置」という行動の問題や、「自転車」の消費やリサイクルの課題から学びを深め、地域の人たちとともにさまざまな活動を実践してきた。2011 年には、当団体と連携してきた松山市立新玉小学校がユネスコスクールの認定を受け、松山国際交流センター「ESD コーディネーター派遣制度」を活用するなど、多様なアクターとともに、地域に根ざした「学び」と「行動」のサイクルを紡いでいる。

(えひめグローバルネットワーク 竹内よし子)



泰阜村 (長野県)

限界集落ならぬ限界自治体とも揶揄される人口 1800 人の村、長野県泰阜村で、村の暮らしの文化に内在する教育力を丁寧に反映させた山村留学や自然体験キャンプを始めて 27 年。グリーンウッド自然体験教育センターは、「何もない村」における自然環境を資本とした「教育」の産業化に成功した。教育事業に参画して刺激を受けた村民は、NPO を立ち上げて民宿や農家レストランをスタート。村内の機関が協働して村の子どもの週末体験教育活動を支え、都市部の大学生が村内の民家で学ぶ仕組みが自主的に組織化されはじめている。そして村の若者の Uターンが始まり、ついに青年団まで復活！ 小さな山村留学に始まる教育活動が、自発的な「学び」の連鎖を伴いつつ持続性を高めている。

(グリーンウッド自然体験教育センター 辻英之)



猟師のおじさんがいきなり来てイノシシを解体。即興の食育授業が始まった。



奈良

奈良では、世界遺産・地域遺産といった文化遺産を切り口に、現地学習で本物に触れる感動と人物の語りへの共感から、持続可能な地域社会の担い手としての当事者意識を育てる世界遺産教育に地域を挙げて取り組んでいる。特に社会人を対象としたESDの普及方法について、昨年夏からのESD奈良円卓会議を通じて、観光がその切り口になるのではないかということが見えてきた。観光は、まず地元民のためにその地の「光」（人・モノ・コト）を見ること。地元の文化財や食文化、芸能などを「知る」ことで、地域を誇りに思い、持続可能な地域社会実現への行動の変革が生じるだろう。地元の、地元による、地元のための観光ESDを奈良から発信していきたい。（奈良教育大学 中澤静男）



奈良からESDの熱い風

金沢

金沢大学は、第2期中期計画に基づき、「地球環境と持続可能な社会づくり」、「環境の現場に学ぶ」をはじめとするESD関連授業の充実、共通教育特別コースとしての「環境・ESD特定コース」の創設等、学生に対するESD授業の強化を図っている。また、地域のユネスコ協会、教育委員会、他大学、自治体等との連携のもと、学校におけるESDやユネスコスクールの支援活動を進めるとともに、そのような支援活動を効果的に行うための知のネットワークづくりを進めている。また近年は、社会教育主事や消費者団体・NGO等に対するESDの周知普及、公民館等におけるESD活動支援にも力を注いでいる。

（金沢大学 鈴木克徳）

新潟

エコプラスは、西太平洋の小さな島ヤップで続けてきたプログラムの20周年事業として、2013年、ヤップ島の若者10人を日本に招く。首都圏で、ゴミや水、食料などについて学び、新潟県南魚沼市でコメを中心に続いてきた伝統的な暮らしを体験する。太平洋の島にも日本の農山村にも、その場の自然環境に調和して組み立ててきた暮らしがあり、そこに持続可能な社会へのヒントがたくさん詰まっている。便利さを追求してきた近代文明を次にどう伸ばしていくのか。老いも若きも一緒になって新しい学びを広め、暮らしと社会をより持続できるものにしていきたい。<http://www.ecoplus.jp/>

（ECOPLUS 大前純一）



『高校生ESDコンソーシアム in 愛知』2012年12月

千葉

環境パートナーシップちばは、持続可能な社会の実現に向けた様々な活動を支援するため、市民・企業・行政との協働の取組みを推進することを目標に活動して17年目を迎えた。現在は、毎年“エコメッセージ”の開催に向け、市民・企業・行政の実行委員会の事務局を担い、団体間のマッチングを目指す通年事業にも取り組んでいる。また、飲料水源全国ワースト1位の印旛沼の水質改善にも、調査・環境学習・啓発活動等で学びあながら官民挙げての活動として参画・協働。2013年からESD-Jに入会し、千葉県から受託した環境学習講座でも市民の担い手養成として、目標に向けた活動を進めている。

（環境パートナーシップちば 横山清美）

愛知 名古屋

愛知では、高等学校ESD愛知コンソーシアム運営委員会という組織が立ち上がり、2012年末に“高校生ESDコンソーシアム in 愛知”が開催され、高校6校によるESD活動報告と50名を超える高校生によるワールドカフェなどが行われた。高校生が主役の「ESD経験交流」の場。「他校生が真剣に取り組んでいるのを聞いて、自分の活動をもっと真剣に考え直さないといけないと思った」。この日初めて会った高校生たちがたった2時間という短い時間で、未来に向けて、地域のために、環境のためにできることを向き合って話し合った。愛知・名古屋は動いている。

（環境省中部環境パートナーシップオフィス 新海洋子）

岩手

岩手県内では、東日本大震災による大津波被害を、被災地の持続可能性を考えるきっかけと捉え、ESD学校教育研究会と環境パートナーシップいわてとの合同で、“ESDと復興 岩手”を2012年11月に開催。この日は、いわて県民情報交流センターでフォーラムを行い、山田町船越小学校の児童が津波に追われながら学校の運動場から駆け上がったという杉山に登り、また、無惨に破壊された防潮堤の見学、漁業者との話し合いを行った。さらに、当時1000人の避難所になった大槌高校で、大槌中学校教諭や、十分な避難マニュアルを整備していたみどり幼稚園園長の話をうかがい、次世代につなぐ持続可能な未来をつくる教育について考えた。

（岩手大学 梶原昌五）

安平町 (北海道)

私たちは、北海道安平町を拠点に、自然、産業、人的資源、地域性のよさを活かし、農や食、人の交流、体験を通じた学びの場をつくる活動に取り組んでいる。例えば、畑をつくる、野菜を育てる、収穫した野菜を使った料理を提供するレストランをつくる、人が集まる、何かを始めたくなる、新しいコミュニティが生まれる、といった流れの中で誰でもが自由にそして主体的に参加し参画できる「しかけ」をコーディネートすることができれば、わたしたちが置き忘れてきた持続可能な「何か」が見えてくるという思いのもと、試行錯誤しながら進めている。

(ソーシャルベンチャーあじょう家本舗
松田 剛史)



全国 企業とNPO等との協働

公益財団法人損保ジャパン環境財団では、環境分野の人材教育を中心とした事業を行っている。大学生・大学院生を対象とした環境NPO・NGOでの長期インターンシップ「損保ジャパンCSOラーニング制度」は、環境分野などのNPO・NGOでの実務を経験するESDの取組みとして2000年度から開始し、全国4地区(関東、関西、愛知、宮城)で実施。これまでに700名以上の参加者が視野を広げる成長の機会とするとともに、その後も多くの方たちが、様々なセクターから、環境問題などの社会的課題に関わり続けている。

<http://www.sjef.org/>

(公益財団法人損保ジャパン環境財団
芦沢 壮一)

高畠町 (山形県) 名古屋市 京都市 高知市 長崎市

子どもたちが主体となった体系的なプログラムを地域でしっかり展開していくためには、これまでの出前授業や単発的な地域団体の関わりによる環境学習では難しく、子どもたちが自ら地域課題を継続的に解決するところまではいき着けない現状がある。そういった認識を学校や地域の団体、住民たちが共有し、希望を膨らませられるよう、各地域の環境団体、国際NGO「FEE Japan」、「環境市民」が一緒になって、山形県高畠町、名古屋市、京都市、高知市、長崎市の5か所で、エコスクールの取組みの理解を深めるためのセミナーを行った。

(環境市民 下村委津子)



大牟田市立吉野小学校
5年 地域の川の環境調査(写真右)
3年 ゲストティーチャーと地域の生き物調べ(写真下)



「学校」ではこんなESDに取り組んでいます

大牟田 (福岡県)

大牟田市立吉野小学校では、市内の全小・中・特別支援学校がユネスコスクールに加盟したことを受け、豊かな自然と住宅街が混在する地域の特性を生かした環境教育を軸にESDに取り組んでいる。2012年度は「めざす児童像の明確化と具体化」「年間指導計画の充実」「発表の場の充実」に重点を置き、1月の「ユネスコスクール地域交流会 in 九州」では子どもたち自ら活動内容を発表した。発達段階に応じて、調べたり、自分たちにできることを考えて具体的に行動したりするようになり、コミュニケーション力や協働的な学びも深まってきている。

<http://www.e-net21.city.omuta.fukuoka.jp/yoshino-es/>

(大牟田市立吉野小学校 新木勝憲)



福山 (広島県)

駅家西小学校は、「ESD で育む人間性 “自主” “自律”」を教師の合い言葉として、ESD の深化と拡充に取り組んでいる。2008 年度には ESD の視点で教育課程を見直し、2009 年度からは新学習指導要領で育む力を重視した駅西型 ESD 関連カレンダーを作成し活用してきた。「環境教育」「多文化・国際理解」「人権・平和教育」の 3 領域において教科や領域等の内容を関連付け、意図的・系統的な指導を行うことで、「自律心」「思考力・判断力・表現力」「責任意識」の能力や態度を育成している。また、6 年間を見通した評価規準を作成し、評価計画や事後の見取りを丁寧に行うことで指導の質的向上に努めている。⇒ p6「オススメ書籍のご紹介」参照
(福山市立駅家西小学校 松岡誠治)



5年生のCO₂削減の学習についての発表風景

西淀川 (大阪府)

大阪府立西淀川高校では環境教育を軸に ESD 活動を推進。地元住民が力を合わせて国の政策を変えた「西淀川公害訴訟」を軸に、自らの等身大の生き方から地域や世界を見る「地に足ついた」視線を育むことを目標に、必修科目「環境」を始めさまざまな学習を行っている。2007 年度からスタートした「菜の花プロジェクト」は、地元の環境 NPO「あおぞら財団」との協働により、地域の連合町内会単位での廃食油回収や、尼崎のバイオ燃料メーカー「浜田化学」などとの協力関係に発展し、年々地域への広がりが進んでいる。2012 年度後半から西淀川区役所との協力も進み、地域、学校、区役所の協働の流れが一步一步積み上がっている。

(大阪府立西淀川高等学校 辻 幸二郎)



「とよなか市民環境展」でのエココミュニケーション部

岡崎 (愛知県)

新香山中学校は、2010 年度に岡崎市教育委員会から「環境学習の推進」の研究委嘱を受け、翌年 11 月に研究の成果を発表した。研究では岡崎環境学習プログラムに添って年間 15 時間の学習を実施。その中から、地域で起きている「獣害」や地球温暖化を背景とした「森や生態系の変化」、職場体験学習から「企業の社会的責任」など、独自のテーマが生まれてきた。生徒自身が環境に対して自分事として問題を設定し、探究活動によって自分の考えを磨き、持続可能な社会をイメージし、行動化の意欲を高められるよう、さらに震災以降のエネルギー供給や共生社会について未来志向で考える授業づくりを目指して実践研究を重ねている。

(岡崎市立新香山中学校 山内貴弘)



江東 (東京都)

八名川小学校が全校体制で ESD に取り組みはじめて 3 年。2011 年度に開発した ESD の年間指導計画「New! ESD カレンダー」を活用し、実践においては「子どもの学びに火をつける」を合い言葉に問題解決的な学習過程の工夫を重ねてきた。すべての研究授業等を公開し国内外からの来校者を受け入れ、また、子どもたちによる“八名川小 ESD まつり”にも、職員による“ESD パワーアップ交流会”にも、全国各地から数十名の方たちが参加。ユネスコスクール全国大会では、『ESD 大賞』を受賞した。今後も、ESD の普及・発展に取り組むので、気軽にお声かけいただきたい。http://www.koto.ed.jp/yanagawa-sho/

(江東区立八名川小学校 手島利夫)

多摩 (東京都)

多摩市教育委員会が実施している ESD 研修会も 4 年目となり、9 つの中学校ブロックごとに地域のリソースを生かした小中一貫の教育活動のあり方を検討するとともに、研究授業を行った。市民の地域への思いや専門性を引き出す場として 3 回の ESD 市民講座を行い、生ゴミの堆肥化とそれを使った花壇づくりやグリーンカーテンのプロジェクトなどの方向性を出した。2013 年度はこの 2 つの流れをつなげるとともに、12 月には多摩市でユネスコスクール全国大会を開催する。稲城市でも来年度は中学校ブロックごとの地域探求学習の展開を図っていくとともに、野沢温泉で毎年実施している体験学習の ESD 化を進めていく。ESD は多摩に根を下ろしつつある。

(エコ・コミュニケーションセンター 森良)

伊豆 (静岡県)

伊豆市立天城中学校では、生徒の『自尊感情』が低いという課題を解決できないだろうかと、2008 年以降全校で ESD に取り組んできた。「地域を『持続可能な社会』に」「体験と地域の人とのつながりから自ら学び・考え・行動する」等を掲げて取り組んできた様々な実践の成果を評価するため、近隣の中学校との比較調査なども行ったところ、ESD の取り組みを通じて「人や地域とのつながり」を深めることが地域への誇りや愛着へとつながり、豊かな自己概念を養うことで確かな『自尊感情』の高まりへとつながっていくという結果が得られた。

(伊豆市立天城中学校)

トピックス 日本初の ESD 研究機関 立教大学 ESD 研究センター

～ 5 年間の活動の記録～

立教大学 ESD 研究センターは、日本初の ESD 研究機関として、2007 年に設立され、『持続可能な開発のための教育 (ESD)』における実践研究と教育企画の開発』として 2007 年度文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業(～ 2011 年度)に選定されました。「環境教育」と「開発教育」を軸に、アジア・太平洋地域を巻き込みながら、研究者だけでなく、NGO や企業、国連機関等を含めた幅広いネットワークを構築し、大きく「アジア」「南太平洋」「CSR」という 3 つのアプローチから実践的研究に取り組んできました。そして、国際的な重要文献の収集・翻訳・紹介、講演会・研究会、教材開発、指導者養成、ESD の現状調査と課題の特定、顔が見えるネットワークの構築など、実に様々な活動を展開してきました。

これらの活動は、ユネスコ本部による「ESD の 10 年」の国際評価においても、優良事例として紹介され、また、ESD 研究センターが主導してきた国内の高等教育機関における ESD をつなぐ活動は、高等教育における国内 ESD ネットワーク組織「HESD」(Higher Education for Sustainable Development) の設立、さらに、高等教育機関の ESD 国際研究ジャーナル「J.of.HESD」のアジア・太平洋地域特集の編集・刊行につながりました。そして、これらの活動を通じて、ESD 研究センターは国内外における ESD 研究と組織化のハブとして、位置づけられました。

ESD 研究センターの研究成果は、『アジア・太平洋地域の ESD の新展開』(明石書店)のような市販本と数多くの教材などとして公表しています(写真参照)。これらの多くは、立教大学 ESD 研究所(文部科学省事業期間終了後に名称を変更)のホームページから、旧 ESD 研究センターのホームページに入ること、閲覧することができます。

2012 年 4 月より、立教大学 ESD 研究所として常設研究所になった現在、従来の活動を一部継承するとともに、福島原発被災者に対する ESD 研究に取り組むなど、新たな活動にも着手しています。今後の活動にご期待ください。

(立教大学 ESD 研究所長 / ESD-J 代表理事 阿部 治)



立教大学 ESD 研究センターの主な出版物等

オススメ書籍の ご紹介



未来をひらく ESD の授業づくり

— 小学生のためのカリキュラムをつくる

定価：2,400 円＋税
発行：ミネルヴァ書房
広島県福山市立駅家西小学校 編
藤井浩樹／川田力 監修

「ゼロから始めるのではなく、今ある教育課程を ESD の視点から捉え直す」一書では、駅家西小学校が実際に行った授業内容を具体的に紹介するとともに、学年別の ESD 関連カレンダーを掲載。ESD に取り組もうとする教員の方には必携の一冊です。(ESD-J 事務局 長澤正嘉)

新メンバー紹介



3 団体、4 名の方が
新メンバーに加わりました。

団体準会員 地球市民育成教育研究所、環境パートナーシップちば、湘南学園中学校高等学校

個人会員 4 名(関東 2 名、中国 2 名)

◇ 今後の予定 ◇

6月15日(土)
2013年度 通常総会
(於:岡山大学)

6月15-16日(土・日)
ESD-J全国ミーティング2013
(於:岡山大学)

年に一度、全国のESD推進者が集まり情報を共有します。※詳細は決まり次第ESD-Jウェブサイトに掲載予定。



本号では、全国の ESD 活動の最前線のみなさんからの最新情報を集めて特集紙面を構成しました。ご多忙のおり、ご協力にあらためて感謝申し上げます。2014 年の節目を意識した内容がここ数回多かったことを踏まえ、地域のみなさんの取り組みに着実な進展があることを確認することも大変重要なことと考えての企画でした。文字数の制限や、掲載確認など不十分な点があったことをお詫びしつつ、今後も各地に根付く ESD 最前線情報をしっかりと扱っていくことを重視していきたいと思っております。(ESD-J 理事 吉澤 卓)

認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)

http://www.esd-j.org/ e-mail: admin@esd-j.org

〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-38-5 日能研ビル201

TEL: 03-5834-2061 FAX: 03-5834-2062

● 会員募集中: 正会員(10,000 円)、準会員(3,000 円) 詳しくは HP をご覧ください ●

発行: 認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議 編集: ESD レポート編集チーム レイアウト: 河村久美

※ ESD-J では、本年度より『ESD レポート』に加えて、新たにコーディネーター情報誌「未来へつなぐ」を発行しております。ぜひ、どちらもあわせてお楽しみください。



この印刷物は、適切に管理された森林の認証木材から作られた紙と、輸送マイレージに配慮し、米ぬか油を使用したライスインキで印刷しています。